大口勇次郎

歴史ブームだという。テレビで時代物の連続ドラマが毎晩のように放映され、歴史を売り物にした月刊誌が何冊も出版され、歴史小説がいつもベストセラーの上位を占めている現状からすれば、たしかにその通りであろう。

歴史小説や歴史挿話のたぐいが、何故われわれの興味を惹くのかを考えてみると、そこにはいろいろな要素が考えられるが、一つには先祖探し(ルーツ)に見られるような時代考証を含めた推理小説的魅力にあり、二つには現代社会の風俗習慣、約束事と異なった条件をもつ時代的制約の下で生きている人たちがもたらす様々な葛藤の面白さにあるのではないかと思う。もちろんベストセラーたりうるには、これらの要素の上に、作者の構想力や描写力が必要なことは云うまでもない。

そのような作品にめぐりあい、小説としての楽しさを満喫したときでも、歴史をやっている立場からすると、ふとものの足りなさを覚えることがある。それは、その作品が歴史上の人物や時代を扱っていても、実はそれらが借景であり、味を添えた風俗にしかすぎないことがあるからである。あるいは「時代的制約」を描いていても、常識的範囲におわっていることが往々にしてあるのである。卑近な例でいえば、捕物帳が刑事物のやき直しであったり、大名の御家騒動が企業小説と同じ論理で展開しているような場合である。しかし、あまりこの点を小説の世界に求めるのは、ないものねだりなのかも知れない。

「事実は小説より奇なり」という言葉があるように、歴史的事実を丹念に積み重ね、そこに一つの論理を把握する

ことによって、フィクションでは到底思いの至らないものを明らかにすることがあるのである。そのようなノンフィクションとして、ここでは二冊の江戸時代を対象とした書物を紹介したいと思う。

一冊目は、『赤穂四十六士論――幕藩制の精神構造――』（田原嗣郎著、吉川弘文館、一九七八）という本である。この本の主題である赤穂事件は、すでに江戸時代から「忠臣蔵」という形で脚色され歌舞伎芝居の評判をとっており、今日でも大佛次郎の「赤穂浪士」をはじめ、現代的味付けをして小説・映画・テレビにくり返し登場している。また主君の仇討ちが何故日本人にもてるのか、という視点から日本人論の絶好の話題ともなっているものである。

著者は、赤穂浪士たちを討入りにまでかりたてた要因を、彼らの書きのこしたものの中から再構成していくのだが、それによると、実は参加したものたちの立場も一様ではなく、浅野家の御家再興を第一義に考える藩家老大石良雄の立場と、亡君の御恩に報ずることのみを考えるいわゆる急進派の下級武士（たとえば堀部安兵衛）の立場は、そのよってたつ基盤からして異るものであることがあきらかにされる。

また討ち入り後に、彼らの行動の正否をめぐって、儒学者たちが一大論争を展開するのだが、著者はその議論のヒダをたどりながら、武士の間に二つの相異なる倫理規範が存在したことを明らかにする。一つは、主君の怨みを晴らした赤穂浪士の行動は、武士の鑑で義士に値するという考えで、家臣の藩主にたいする忠誠を絶対とする考え方である。他は、たとえ主人の仇討ちでも幕府の処置に対する批判行動は許されないとする幕府重視の考えである。この二つはともに幕藩体制といわれる当時の存立基盤そのものに基礎をおく考えで、平常では両者は車の両輪となって円滑に進んでいるが、赤穂事件ではこの両者の矛盾が表面化したものであった。

このように、著者によれば、当時の武士をとりまく精神構造は、その社会体制や文化的伝統の中で、重層的に構成されていることが明らかにされ、従って赤穂四十六士の行動もまた、主君の仇討という単色なものでなく、複合的でかつ個性的な彩りをもって、われわれにせまってくるのである。著者は、この本を「学術書として書いた。」とその〝まえがき〟で記しているが、同時に引用原文を現代語に書きかえるなど周到な用意もしており、少し腰をすえれば、歴

史小説を好んで読む人なら、きっと惹きこまれざるをえない、緻密な論理と内容をもった書物である。

つぎに紹介したい本は、『にっぽん音吉漂流記』（春名徹著、晶文社、一九七九）である。前の本の著者は専門の思想家であったが、この本の著者は史学出身の出版人である。著者は、歴史の片隅にかすかに名前をおとした一人の漂流船員音吉を取上げて、その足跡をたどり、漂流の記録はもちろん各種の資料をひもどき、故郷の村を訪ねたり、救助したアメリカ人をさがして米・英の図書館まで追跡するという、ジャーナリストとしての行動力をもったルーツ探しは、まさに歴史考証学の方法でもある。

鎖国時代の日本において、漁船や貨物船が風雨にあって難船し漂流したのち、外国人に救助されさまざまな曲折を経て帰国するという漂流譚は、江戸時代以来かなりの数が書きのこされている。このことを主題にした小説もいくつかあって、たとえば井上靖の「おろしや国酔夢譚」は、伊勢の大黒屋光太夫の一行が漂流し露国に救助され、のちに送還されるまでの十一年間の数奇な体験と望郷の念を、もっぱら光太夫の口述記録にもとづいて形象化した作品である。

これとくらべると音吉は、漂流記を口述していないし、そもそも日本へ帰りつくことも出来なかった人物である。光太夫がレザノフとともに帰国して歴史の脚光をあびたとすれば、音吉は、異国船打払令によって祖国の砲弾をあび、国際情勢と幕府の政策との不幸な谷間にあって帰国を断念することを余儀なくされたのであった。

この本は、音吉についての断片的な情報と史料を丹念につなぎ合わせて、開国前後のあわただしい国際関係の中に生きた一人の日本人の生涯を浮かび上らせているが、著者はその終章を「単に望郷の想いではなく」と題して、故郷を捨てかつ日本を想っている音吉をえがいてみせる。評伝を書きながら、鎖国とは庶民にとって何であったかを考えさせてくれる書物である。

この二冊の本は、それぞれ仇討ち、漂流という、どちらも教科書風の概説書では重要とされず、一つのエピソードにしかすぎない主題をとりあげて、歴史の面白さを充分に味わわせてくれるとともに、そこに鋭いメスを加えることによって、江戸時代社会の本質に触れる部分を探りあてているのである。

（お茶の水女子大学・日本史）